ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集　図　書　委　員　会
昭和59年12月18日

No. 55

福島高専 図書館報

目　　次

巻頭言 …… 2
読書随想 …… 3
私の読んだ本 …… 6
新着図書目録 …… 19
寄贈図書紹介 …… 23

❋ 巻頭言 ❋

読書によって考える習慣を

機械工学科教官　佐　藤　顕　二

ビブリアは昭和46年6月26日に№1が発行されて以来14年目を迎え，№55を数えるまでになった。その間，若者が深刻にものを考えたり計算したりすることがだんだんと嫌いになってきた所謂「バカチョン」時代の到来が取りざたされ，若者の活字ばなれが話題にのぼり，多数の学生・教官によって読書感想文や読書のすすめがいろいろと紙面を賑わしてきた。

昭和57年度国立高専図書館実態調査によると，本校学生の図書館利用は，貸出冊数では年間10,392冊（1日当り42冊）で54校中7位，貸出者数では年間10,161人（1日当り41人）で最多，入館者数では年間延人員34,292人（1日当り138人）で16位と云う状況である。定員800人の学校としてはどんなものだろうか。

昔から読書は青年の著しい興味の一つであり，青年の文化的な生活内容の形成にあずかるものの一つでもあり，青年に与えられたすばらしい新しい世界であることは今も変りないはずである。作家の山田智彦氏が云っているように，「急に本を読まなくなったからと云って人間はすぐ莫迦になるわけではなく，同様に本を読んだからと云って人はすぐ利巧になるわけでもない」が故に，ニューメディア時代の活字ばなれがわからないわけではない。だが，殆んどすべての教科の学習は学生の読書能力に依存していることを銘記して欲しい。また，氏は「若し読書を薬にたとえるならば即効性のもっとも薄い薬とも云えない薬なのではないか。長期間にわたって服用してはじめて何らかの効能があらわれる漢方薬のようなものであろうか」とも云っておられる。将来伸びるかどうかは青年時代の読書如何によると云っても過言ではあるまい。確かに，人が本を読むのはそれが心の糧になるからである。しかも，若い時に読む程旺盛な吸収力によって身につくものである。人には夫々読書の仕方がある。経営の神様と云われた土光さんは「本を読む時は人と付き合うと同じようにいつも問答をしながら読む」と話しておられるがそうあって欲しいと思う。

昔から「習い性となる」とか，「習慣は第二の天性なり」とか云われているが，若いうちに読書の習慣をつけておかないとその人の人生は余りにも寂しいものになってしまうであろう。有名な数学者の岡潔先生は「人間は一つのことにとり組み続けていると必ずそのことが面白くなるように作られている」と述べられているが，味わうべき言葉と思う。何でもやってやろうと云うチャレンジ精神と心のおもむくまま手当り次第何でもかじってみる強烈な好奇心をもっているのが青年であり，しかも青年は苦労を惜しまないものであるはずである。

これからの社会は，工業社会から徐々に変質して新しい知恵の値打を重視する社会　「知恵の社会」が形成され，人間本来の能力開発が本格的に行われていかなければならない時代　「自発性（尊重）の時代」へと推移して行くと云われている。文化的な社会の大きな恵みである読書の習慣を身につけ，読書を通じて考える訓練をし，頭脳を使うようにして自分自身の能力を高め，創造する力を培って欲しいものである。そして，知的・感情的に豊かな人生を送って欲しいと念願するものである。

ベーコン曰く，「読むことは充実した人間を作る。書くことは正確な人間を作る。話すことは準備のよい人間を作る」と。

表紙写真：福島工業高等専門学校図書館全景

読　書　随　想

❀私の読書法❀

電気工学科教官　渡　辺　　博

現代はある意味で情報過多の時代である。このような時代を生きる我々は，外からの情報をただ慢然と受入れるのではなく，自分にとっても本当に必要で且つ重要な情報をこれらの中から取捨選択し，積極的にその吸収に努めていかなければならない。この事は読書の場合についても言える。町の書店に行くと，その店頭には新刊書が溢れ，おびただしい数の本が並んでいる。この中からどのような種類の本をどのような基準で選択していったら良いか，誰しもそこで大きな戸惑いを感じてしまうのが実情であろう。

私は，昭和42年に高専卒業後すぐに仙台に行き，東北大学に勤めましたので，この4月高専にもどるまで丁度17年間大学に居たことになります。この間の生活は，ほとんどが朝8時頃家を出て夜8時過ぎに帰宅する毎日でしたから，読書は専ら朝夕の通勤時間に電車やバスの中を利用して行ったように思います。大学では，その仕事の関係上，自分の研究に関連した論文や専門書を読むことが多く，専門外の文学書や娯楽・教養書を数多く読むことはなかなか出来ませんでした。しかし，限られた時間の中で，その時々に応じ，自分の最も興味のある事柄あるいは関心のある問題を取扱った本を書店に行っては多数の本の中から選び出し，これを自分に合った一定のペースで読み続けてきたように思います。決して手当り次第に本を読むのではなく，かなりの精選主義で読書を続けてきました。人間誰しも，その精神的及び肉体的成長と共に考え方も変わり，物事に対する興味や関心も大きく変化するものです。読書の傾向も同じです。自分がその時最も興味があり且つ読みたいと思う本を自分から選び出して読むようにすれば，その本の内容も自然に自分の中に入って来るものであるし，本から得る物も多いはずです。その本の中に自分と同じような考え方や体験談が書かれていたりすると一種の喜びや安堵感を覚え，同時に著者との一体感が感じられて嬉しくなった経験があります。これは推薦図書だから読まなければならないというような半ば受身的な考え方をしてしまうと読書は苦痛になるが，主体的に自分の読みたい本を選択し読み続けていけば，読書は本当に楽しいものになるはずです。

以上，私の読書法とその考え方の一端を述べましたが，学生諸君の読書欲を掻き立てる一助となれば幸いです。ただし，読書がいくら大切だからといって，授業時間中に先生の話をそっちのけにして読書に精を出されても困るが……。

❀読書もいいが❀

一般科教官　小　林　伸　吉

文字の起源についてプラトンは次のような伝説を書き残している。昔，エジプトの発明の神，テウトが文字を発明し，主神タモスにその効用を「この文字というものを学べば，人間の知恵はたかまり，もの覚えは良くなるでしょう。私が発見したのは記憶と知恵の秘訣なのです」と説明した。タモス神は答えた「技術上の事柄を生み出す力を持った人と，生み出された技術がそれを使う人々にどのような害を与え，どのような益をもたらすかを判断する力を持った人とは，別の者なのだ。あなたは，文字の生みの親として，愛情にほだされて，文字が実際に持っている効用とは正反対のことを言っている。人々がこの文字というものを学ぶと，記憶力の訓練がなおざりにされるため，その人たちの魂の中には，忘れっぽい性質が植え付けられるのだ。彼等は，書いたものを信頼して，ものを思い出すのに，自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり，自分で自分の力によって内から思い出すことをしなくなるのだ。あなたが発明したのは，記憶の秘訣なのだ。また他方，あなたがこれを学ぶ人に与える知恵というのは，知恵の外見であって，真実の知恵ではない。彼等は，親しく教えを受けなくても物知りになるため，多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら，見かけだけは非常な博識家であると思われるようになるだろうし，また知者となるかわりに知者であるというぬぼれだけが発

達するため，付き合いにくい人間となるだろう」。テレビは人々の経験を豊かにするという宣伝文句とは裏腹に，本来の経験の場を減少させたという批判は早くからあったが，人間精神を豊かにするという読書が，実は人間の記憶力をだめにし，判断力を鈍らせるという批判は，古くからあるわりには，つねに少数派のようである。

そもそも本は何のために読むのか。知識を得るためである，と言われる。昔はともかく今は知識獲得の手段は無数にある。知識という目的のみに限れば，読書はかなり効率の悪い手段といえる。知識の量という点で，若者は確実に年寄りを凌駕している。アリストテレスよりも高専の学生のほうが知識はある。どちらが偉大であるかは別の尺度による。

すべての本を精読することは出来ないし，必要もない。繰り返し読む本，走り読みする本，目次と索引だけが必要な本，まったく読む必要のない本，装飾用の本。世の中にはたくさんの種類の本があり，大半は読む必要のないものである。繰り返し精読するに値するものは，直感的にそれと知れるもので　一生のうち一冊でも巡り会えれば幸せと言わねばならない。

「最近の若い者は本を読まない」と言われ始めてからすでに数十年が過ぎた。今そう言っている年寄りは若い頃そう言われて育った世代である。その前の世代は読むべき本を持たず，そしてその前は読書能力のない者が大半の世代であった。要するに，昔も今も，ほんとうに本を読む者は決して多くはなかったと思われる。本の出版点数は今でも確実に伸びつつある。年寄りがかつて読んだ本を若者が読まないだけの話である。私はここで怠惰な若者の代弁をしているつもりはない。本は読まないよりも読んだほうが良いに決まっている。ただ，読書によるものをはじめとする，いわゆる情報（知識）の氾濫の中では自分の頭で考えることを止めてしまったのではないかと心配するのである。勿論，「なぜ考えなければいけないのか」と疑問を持つ人もいることは知っている。

❁私の本棚❁
—21世紀を生きる若人たちへ—

土木工学科教官　高　橋　省　二

◇21世紀を生き抜くために何をなすべきか。

20世紀は残り少くなって来た。あと16年を残すだけである。我々は多分21世紀を無事迎えることが出来るであろう。

今世紀は人類にとって記念すべき世紀であるといえる。例えば，人類が始めて宇宙空間を飛行し月に行って来た。原子の火を点した。画像を送るテレビジョンを発明した。コンピューターを実用化した。といったように科学技術の進歩発展には著しいものがある。このような点では素晴らしい世紀といえるが手ばなしで喜んでばかりいられない。というのは文明は人類福祉の向上のために発展させてきたはずであるが，本当にそうなのかと凝って見なければならないことが何時の間にか出て来ている。例えば，食糧の増産と医学の進歩により生活環境に恵まれて世界の人口は過去45年間に2倍に増加して47億人に達している。第二次大戦中発明された原子爆弾はその後も生産が続けられ米・ソの合計数は5万発に達するという。アフリカ外世界の砂漠は異常な速さで拡がっている。化石燃料である石油はあと数十年で使い尽されるかも知れない。

若しも世界の人口が100億人になったなら地球上で生産される食糧の大部分は人類だけで食べてしまうことになる。国連の推計によれば2025年の世界人口は最大91億人となっている。食糧の不足は現在アフリカだけの問題であるが近い将来には全世界の問題となるであろう。

若しも石油が無くなったら現在の生活水準を維持していけるかどうかわからない。天が落ちて来るといって心配することを杞憂という。転じて有りそうも無いことを心配することであるが，原爆戦争も何かの間違いによってミサイルが発射されたとすれば絶対に起らないとはいい切れるだろうか，原爆戦争についてはあくまでも杞憂であってほしいが，化石燃料については今後何時までも油田の発見が出来るという見通しはない。

このように21世紀は食料，燃料が足りるというよりむしろ不足するという方が確かである。このような時代はそう遠い将来ではなくて21世紀には確実にやってくると思われるのである。

◇かけがえのない地球

大昔しの人は太陽や星は地球の周りを廻っていると考えていた。それが天文学の進歩により太陽の周りを地球が廻っていることがわかった。火星には生物がいるかも知れないと思われてきたが何も住めないようである。大陸は昔，陸つづきであったが今では離れ離れになっている。地球の様子も段々とはっきりしてきた。

一方宇宙の様子も電波望遠鏡や宇宙船の直接探

査により以前とは比べようもない程はっきりしてきた。

生物が生きて行ける為には総べての条件が満たされなければならないが，その条件の中の唯一つだけでも欠けることがあれば生命の維持は出来ないのである。地球の表面は生命を維持する総べての条件が満足されている極めて希な空間なのである。宇宙空間から見た地球は青く美しかったといわれているがまた生命の存続できる空間であるということも宇宙飛行士は宇宙船内の日常生活からいやという程身につまされて感じたと思うのである。

地球の表面には空気と水があり適当な温度と気圧に保たれていて，食料が生産され放射能から保護されている。地球は自然にあらゆる条件を満足して生命をはぐくんできた。これはかけがえのないことであると気づかなければならないのである。

その地球が今危機に直面している。最近本屋の店頭でみかけた本に次のようなものがある。

文明の逆説(危機の時代の人間研究) 立花隆著59年6月発行，講談社・滅びゆく日本の野生岩合徳光著59年6月発行，集英社・生態学から見た自然吉良竜夫著58年11月発行，河出書房・科学文明に未来はあるか野坂昭如編58年3月発行岩波新書，少し前になるが，生物が一日一種消えてゆく小原秀雄56年7月発行，講談社・複合汚染(小説)有吉佐和子著54年5月新潮社・更に古くなるが，なにが環境の危機を招いたかバリーコモナー著47年4月発行講談社・植物と人間(生物社会のバランス)宮脇昭著45年3月NHKブックといっ本である。何れも人間が築き上げてきた科学文明により人間生活は向上したがその反面自然環境が破壊され，やがては地球は生物が住めなるかも知れないと警告しているのである。その中からショッキングな一例だけあげてみる。

立花隆著文明の逆説，生物学革命人類の未来，の始めにはーハワイの博物館に"人類の墓"が建てられた。その墓碑銘にいわく，「この種属は二万年前に生まれ，非常に繁栄したが，自らのつくりだした廃棄物と有害物と人口のために，2030年に滅びた」と書いてある。2030年は21世紀の前半であり，まさかそうなるとは思いたくないが，原爆，人口，公害といった面から考えて杞憂と断言できない現象が多すぎると思えるのである。

かけがえのない地球を，その上に住む動物植物を死に断えさせないために今何をなさなければならないかを考えるべき時であると思うのである。

◇我々のなすべきこと

学校では英語数学物理といった学問が重要視されている。これは入試の課目に選ばれていることから何えるが今人間にとって一番大切な学問とは何だろう前に述べた以外の哲学と生物学であるように思える。命あってのものだねというがその生命が危険に晒されていることに注目しもう一度人間とは何か生命とは何かといった面について考えてみなければならないのではないかと思うのである。人類は決して馬鹿であるはずはなく必ずや人類の叡知によって幾多の難関を突破し平和のうちに22世紀を迎えられることを期待している。

私の本棚には地球や宇宙の本といったことに関係のある本がいつしか入っている。岩波新書など簡単に手に入る本を並べてみるのでこの中から適当のものを選んで読んで頂きたい。前述の本も同様である。ー

地球の科学(大陸は移動する)竹内均上田誠也，地球の歴史井尻正二，湊正雄，続地球の科学，新しい地球観上田誠也，都市の自然(人間と自然のかかわりあい)品田穣，世界の自然を守る藤原英司，地球史小嶋稔，宇宙と星畑中茂夫，大陽よ汝は動かずアーレテイジ，宇宙空間えの道畑中武夫，大陽系(その力学的秩序)掘源一郎，宇宙空間への招待西田篤弘，日本の自然中野尊正小林国夫，恐るべき公害庄司光宮本憲一，日本列島湊正雄井尻正二，日本の公害庄司光宮本憲一，火山の話中林一明，核廃絶は可能か飲島宗一豊田利幸牧二郎などがある。また物理学の発展については，物理学は如何に創られたか上下アインシュタイン，インフェルト，物理学とは何だろうか上下朝永振一郎などがある。また，人々の原理マルサスも切実な問題をとらえている。

ぼんやりしていては危険信号が打上げられても気がつかない。注意していればわずかな信号により危険を察知して回避出きる。今では環境の危機に対して警鐘が乱打される。人類，いな学生諸君の努力に期待してやまない。

この作文をまとめている最中11月9日NHKテレビは「21世紀は警告する。(砂漠か洪水か，山河は誰れの)」と題する放送を行なっていた。ブラジルではアマゾン河の流域を関発するに焼畑農業を使っているという。アフリカの旱魃を救うため文明国人が井戸を掘って与えたという。その為アマゾンでは熱帯両林が，アフリカでは牧草が急激に失われている。そのあとに残るものは唯砂漠だけである。文明の前に森村があり文明のあとに砂漠があるといった人がいたというが，文明についても長い目で見直す必要があることを痛感した。

◇学生読書感想文特集◇

私の読んだ本

「あすなろ物語」を読んで
私も明日は檜になりたい

1年土木　石川武彦

「あすなろ」は漢字で，「翌檜」と書く。あすは檜になろう，あすは檜になろうと一生懸命考えている木である。この物語は，主人公鮎太と彼が出会う六人の女，親友，仕事仲間らが，翌檜から檜になろうと精一杯努力する姿を描いた，正に「あすなろ物語」である。鮎太は，祖母りょうと土蔵の中に住んでいた。そこへ，りょうの身内の冴子が入ってきた。だが冴子は，都会の大学生と心中してしまった。それも冴子が言っていた翌檜の大木の下で。その時から鮎太が翌檜という言葉を人生の目標のように思い始めたのではないかと思う。そして，彼は，がむしゃらに勉強した。眠る時間を削ってまで，勉強した。ぼくには，こんな集中心も気力もない。勉強する時間を削って，眠る。と，いう方だ。だから，鮎太のことを尊敬してしまう。そして，自分は，ちっぽけな人間なのだなあと思ってしまう。しかし，秀才鮎太の生活が，寺に下宿してから変わった。寺には，住職の娘雪枝がいたからである。雪枝は，頭のいい鮎太にも，いろいろな仕事をいいつけた。しかし，それを鮎太が，「いやな女だ」などと思わなかったのは，雪枝の性格的な魅力が大きかったからだろう。それに，鮎太が学芸会でリーダーを暗誦し，帰りに上級生に殴られ，けがをした時，手当をしてくれ，殴った奴に文句をいってやった。そういう所が鮎太が憎めなかったんだろう。鮎太の成績が二番になり，体操や武道が悪かったので，運動をしろと言った。彼は，鉄棒を始めた。すると雪枝は，コーチをつれて来た。ここらへんは，雪枝のスポーツ好きで，快活な所が出ていて，読んでいても，すがすがしかった。こういうことをしていたからか，鮎太の成績は，急降下した。鮎太も同じ人間だったんだなあと思い，人間なんかみんなちっぽけなもんなんだと開き直ってしまった。

鮎太は，無試験で入れる九州の大学へ進んだ。なぜ北国から九州の大学へ行ったのか，それは，高校時代に仲間と取巻いた佐分利信子夫人の郷里が九州の博多であったからだ。しかし，鮎太が九州に行くと，信子夫人は妹らの学校のため，東京に行ってしまった。彼は運がなくかわいそうだと思った。東京の大学へ行った仲間から手紙がきて，それがわかると，すぐに東京へ行ってしまった。こういう行動力は，ぼくにはない。せいぜい運が悪かったと自分を納得させるくらいだろう。こういう人間は，翌檜で，きっと大きな檜になるんだろう。クラスメートの中でも卒業して翌檜から檜になる人もいるだろう。でも翌檜で終わってしまう人も多くさんいるだろう。ぼくは，檜に，大きな檜になりたい。最後に，井上靖さんが書いたこの本は，読んでいて飽きない所やあすなろを題材にしたところが，良かった。

安部公房「砂の女」
—思想的解釈論—

3年機械　藤　田　晴　生

「彼」は義務から逃避し，また，世に名を売るべく，彼の自由の象徴である砂とそこに住む虫の採集にと砂の部落へ赴くが，そこにもまた，砂を掻くという義務が待っていた。

私考えるに，義務というものはそれほどまでに執拗につきまとって，果たしていいものだろうか。これを「自由」というものの観点から考えてみる。

自由というものは，少なからず誰しもが持ち続けている希望である。その自由という名で変換される希望はそのものの形はもってなく，義務という名でカモフラージュされた束縛の中で，初めて姿を表わすものである。輝くものである。しかし，希望と信じたはずのものが束縛であり，その事実を知ったときは悲劇である。その裏切りは場合においては自我の崩壊にもつながる。しかしである，その崩壊を促するのは紛れもなく已なのである。この事実に作者は気付いていたのか，本文中にある言葉に「希望は，他人に語るものであっても，自分で夢みるものではない。」というような考えようによっては開き直りの倫理が生じている。

つまり，裏切りが少しでも存在している限り，希望は託すべきではなく，真の意味での希望というものを求めること自体無意味なのであろうか。いや私は思う。その無意味さの中にこそ希望を託すべきであり，自由とは自由を追い求めることそれそのものを表わしているのではないかと。

本文中に「歩かないですむ自由」という言葉がでてくる。果たしてそんなものがあるのか。前に述べた私の意見からすると，そんなものは束縛により飽和させられ，それを「自由」として洗脳されてしまった悲劇の一つにすぎない。自由を静止させることは，自我を放棄することであり，それにより残るものは精神の石像のみである。

しかし，自由を追い求めること自体によって，その報酬が必ずしも与えられるかというとそうではない。一般的な考えからすると，自由を追ったのだから報われてもいいのではないかというのだが，私は報われなくてもよいのではと思う。必ず報われるという「確信」の念はある種のうぬぼれの要素を含んでおり，誤ちをおかしやすい。それよりもある意味での猜疑心をうまく利用し，報われるか報われないか賭けてみる方が，ときには客観的にもなれる冷静な目を持てるのではと思うのである。

どちらにしろ自由を追わぬことにはわからない。

さて，かなり話してきたようだが最初の問いにもどる。

自由の観点から見た義務は果てしなくつらいものであるが，縛られるから自由を見いだす。見いだそうとする。そして本質的に肉体を持っている限り逃避は困難を極める。事実，肉体はそれを望んでいるかも知れない。私は「肉体」という言葉を使ったが，それなら精神だけなら可能か。それはわからない。そんなところからプラトンの「イデア」なども生まれてきたのであろう。

つまり現在という時間の中に自分という存在を確認できる限り，考えるような解放を望むことは不可能なのである。それでも求めようとするなら，真理（APOCALYPSE）について悟らねばならない。常人にそれを求めるのははなはだ無謀とも言えるが，要するに自己の再確認を続ければよいのである。我々がイエス・キリストになるのは不可能なのであるから。

かつてベトナム戦争で真理が問われたように，すべての極限まで自分を追い込めば，自ずとわかってくるかも知れない。「彼」は，穴の中で真理を見たのだろうか？，最後の部分で，ようやく脱出の機会が与えられたのに，彼は踏み止る。子供ができたせいかも知れないし，「精神の石像」になってしまったのかも知れないし，彼なりの真実を得たせいかも知れないし，真実のほどは軽薄な私には考えられない。他の読者に聞いてみたいものである。

私はこの「砂の女」を以上のように受け取ったのだが，もしかしたら大マチガイなのかもしれない。なにしろ軽薄なもので，自分の意見が責任を持つにはあまりに大きなものであるので……とにかく読んでみてほしい。

最後に逃げてしまった私の感想などでは最低の書き方であろう。私は卑劣である。しかし卑劣に述べざるを得ない作品というものもあることは認めざるを得ないだろう。

「古代への情熱」を読んで
シュリーマンの生涯に感銘

2年機械　小　林　　健

私は新潮文庫100冊の本の中から,「古代への情熱」を選んでみた。これはトロヤを発見したシュリーマンの伝記であるが，私は特に彼の若き時代の生き方に感銘を受けた。

彼の少年時代は貧しくはあったが，彼の父が歴史に興味を持っていたこともあって伝説のトロヤへの夢は大きくふくらんでいった。

しかし彼は多くの面において不幸だったといえる。幼くして将来を誓いあった恋人と引きさかれ，また無理な労働で体をこわしもした。そんな逆境の中でも彼はトロヤへの夢をすてなかった。ここが我々とちがうところだと思う。少年時代の彼よりも裕福なはずの我々が，なにか大きな事に生涯の情熱をかけることを知らないのである。夢は夢とあきらめ，求めようとしない。心の底でそれを欲しながらも，だ。

夢をすてずに努力すれば幸福はむこうからやってくるというが，シュリーマンはまさにそれであった。オランダに渡った彼はそこで貿易関係の仕事につき，大がかりな発掘調査に充分な，巨万の富を築くのである。彼はトロヤ発見とは関係のない貿易の仕事につきながらも，その夢を持ち続け，勉強をした。ここにも我々との大きなちがいがみられる。私ならおそらく，本意でないとしてもその職を捨てずにうもれてしまうだろう。少なくとも一定の収入はえられるのだから。夢を追い続けたシュリーマンの波乱万丈の生涯は，私にとっては理想である。だがそれを追う道は又ヌクヌクとくらす我々には険しいものであろう。

また，本編とは関係ないのだが，この本には彼自身の語学の勉強の仕方がくわしくのっていた。どんな言葉も6ケ月で習得できるというその方法に私はひどく興味をもった。その方法はこうである。文法その他のむずかしいことはおいておき，まず生の言葉に接するのだ。そしてその語で書かれた本を1冊，暗唱できるほどになるまで音読するのだそうだ。確かに合理的だと思える。冬休みはこの方法で英語を勉強してみようと思う。

「塩狩峠」を読んで

2年電気　相　良　理　一

人のために自分の命を捨てる。このことがどんなにすばらしいこととわかっていても普通の人にはできないであろう。もちろん，私もできない人間の一人である。よく人は，自分の命を大切にしろと言う。人間の命とは何であろうか。

主人公の永野信夫は自分が乗っていた客車が坂の途中で機関車から切離されてしまい，暴走したとき，自分の命を犠牲にして多くの人々の命を救ったのであった。彼には結婚すると約束した人がいるにもかかわらずやった事であった。私がこの状況におかれたら，自分だけ助かろうとして，世間のひんしゃくを買ったかもしれない。

信夫が子供のころ，町人の子供と屋根裏で遊んでいて，突き落とされるということがあった。信夫は父に，「町人の子供なんかに……。」と言ったところ，ひっぱたかれてしまった。信夫は祖母に自分の家は士族で町人とは違う人間だと聞かされていたのでほめられると思ったのだろう。しかし父はほめもせず，福沢諭吉の「天は人の上に……」という言葉を信夫に言って人間は全て平等であることを教えたのであった。

信夫は23のとき今まで住んでいた東京から北海道へ渡る。そして友達の勤めている鉄道会社に入社した。そんなある年の暮のこと彼の同僚が不祥事をおこして会社をやめてしまう。信夫はこの同僚を救うために，上司の家の玄関で三和土に頭をすりつけてまで詫びたのであった。

作者は，この主人公信夫を通して何を言いたかったのであろうか。それは，信夫がキリスト教の伝道師から聞いたことにあると思う。「真に自分がかわいいとは，おのれのみにくさを憎むことである。」「愛とは，自分の最も大切なものを人にやってしまうことである。」この言葉は伝道師のものであると同時に作者自身の言葉でもあると思う。

トリックの妙
「オリエント急行殺人事件」

1年機械　石　橋　勝　進

ぼくは，あまり今まで推理小説は読んだことがなかったのですが，今度が良い機会だと思って読んでみました。

読んでみて，とてもおもしろかったです。中部ヨーロッパを走るオリエント急行で殺人事件がおき，たまたま同じ列車に乗りあわせた名探偵ポワロ氏が，この難事件を解決していくのです。

ぼくは，最後まで犯人がだれなのか分かりませんでした。乗客の中に必ず犯人がいるはずなのですが，すべての人に強力なアリバイがあるのです。しかし，ポワロは見事に解決するのです。しかしながら，この事件の結末にはおどろきました。まさか乗客12人，全員が犯人だったとは，まったく思いもよりませんでした。

他に感心したことは，やはりポワロ氏の名推理です。

過去におこった幼児誘拐事件をきっかけにして，乗客12人の過去を調べ出し，また，その12人のしくんだトリックを，次々とあばいていくのは，読んでいて，この男はすごく頭がきれるなあ。とただただ感心するだけでした。

また，このようなトリックを考え出し，それに，乗客一人一人の個性の設定やアリバイなどを考えた，この作品の作者，アガサ・クリスティもぼくはとても頭の良い人だろうと思っています。はっきり言って尊敬してしまいます。このアガサ・クリスティという人はこの作品の他にも，ぼくに言わせれば話の複雑な作品を60冊近くも出していることは，おどろいてしまいます。

ぼくは，このような素晴らしい推理小説家が，2人か3人で手を組んで，犯罪の計画を綿密に立てて，もしそれを実行したら，3億円事件も目ではないような，すごい完全犯罪ができるのではないかと，余計なことを考えてしまいました。

最後に，これを良いきかいにして，もっといろんな種類の本を，たくさんとまではいかなくとも読んでみたいと思いました。

「老人と海」を読んで

1年電気　田　中　正　明

この老人と海という本は，読んだ人を勇気づけてくれる。そんな本です。

この本は，キューバの老漁夫サンチャゴが長い不漁にも負げず，毎日たった一人で漁にでていると，ある日，残りわずかな餌に，とてつもない大魚がかかり，それから4日の間老人と大魚の死闘が行われる。そして死闘の末，老人は勝つが，帰途サメに襲われ，舟にくくりつけた獲物を，食われてしまうといったストーリーです。文章表現は，徹底した外面描写で，複雑な心理描写は，いっさいないのですが，読者の心をひきつける，不思議な魅力をもっています。とてもわかりやすく，僕にもいっきに読むことができました。

大魚との死闘の中，老人は，大魚に話しかけたり，ひとりごとを言ったりしました。それをすることで孤独に耐えたのです。でも，4日も一人だったら，普通の人では，気が狂ってしまいそうなものです。その上，腕がつったり，けがをしたりしたら，僕なら，勝負をすてて，逃げ帰ることでしょう。この死闘は，彼の老体には，そうとうきつかったに違いありません。それに耐えうる彼の不屈の精神力には，驚嘆させられました。僕は，何か反省させられた気持ちでした。

彼が，大魚に話しかけた言葉には，「お前は兄弟だ。」とか，「魚って，友達だ。」とか，「お前も腹がへっただろうな。」など，大魚を愛し，思いやるような言葉が，たくさんあったのですが，それ以上に，「お前を殺す。」とか，「お前を殺さなければならない」等，非情な言葉も多かった。彼も，自分が初めて見る立派で気高い姿の大魚を殺したくはないと思ったのでしょうが，自分が生きてゆくには殺さなければならない。自分勝手な考え方のような気がしたが，否定できないと思いました。そして，自然のきびしさを感じ，それに耐えた老人の姿に，人間の強さをみたような気がしました。

老人は，死闘の末勝った。でも闘いは終っていなかったのです。死んだ大魚の血のにおいをかぎつけて鮫が襲ってきたのでした。老人は必死に闘ったが，大魚の体は，どんどん喰われていった。4日も闘い合った友ともいうべき大魚の体が頭と尾だけになったとき，彼はくやしく，自分を情けなく思っただろう。そしてこの時ばかりは，彼の海と同じ色をたたえ，生き生きしていた瞳も，生気を失ってしまっていただろうと思いました。

小屋につくと，彼は眠った。彼は，ライオンの夢を見ていた。僕は，彼の夢の中のライオンは，アフリカのあたたかい草原で，気持ちよさそうに寝ているように思えました。そして次の日からも，くもひとつない空の下で，空の色と区別ができないようなきれいな海で，漁をしている老人の姿が目にうかびました。この本は，老人と大魚の死闘を通じて，人間の強さ，そして強くなるためには勇気が必要であるということを教えてくれました。僕はこの本をまた何度となく読むことでしょう。

「伊豆の踊り子」を読んで

2年土木　山　岸　和　宏

この作品は一度授業で習ったのだけれど，教科書に載っているものは抜けている箇所があると聞いたので『それなら！』と思い，一度習った作品ではあるがこの作品を読むことにした。

この小説を読んでみて，３つの主な感想を持った。

１つは，「雨脚が杉の密林を白く……麓から私を追って来た。」「トンネルの出口から……峠道が稲妻のように流れていた。」などの，動きのない自然を，動きあるものにおきかえ表すその巧みさに感心した。

２つめは，「私」の心の動き（成長）である。旅を始める動機は自分の性質が孤児根性で歪んでいるからということだったのに，芸人達と一緒に旅をし，様々なことを見聞きすることによって東京に帰る頃には「私はどんなに親切にされても，……美しい空虚な気持だった。」と旅に出る前では考えられない程の成長を成し遂げたその心の動きの過程にひかれた。

３つめは，私の心の成長に最も貢献したと思われる，「髪を豊かに誇張して描いた，稗史的な娘の絵姿のような感じだった。」「それから彼女は花のように笑うのだった。」「昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。眦の紅が……幼い凛々しさを与えていた。」など静的，動的にとらえられた踊子の清純さである。この踊子の清らかさが私の興味の対象となり，「私」の心を成長させた。このことに気をひかれた。

最後に，この小説の意味するものは，３つめの感想でも触れたが，やはりそれは，少女の持つ犯しがたい清らかさではないだろうか，私の心の成長は，それの偉大さの証明であり，ある意味でそれの力の探究であろう，これらのことがこの小説のすべてではないだろうかと思った。

「坊ちゃん」を読んで

1年土木　関　口　哲　也

僕は今までこの「坊っちゃん。」のような本,いわゆる名作と呼ばれるような本を読んだことがあまりない。普段はＳＦ物や推理小説などしか読まないので，この本を読み初める時は途中であきてしまうのではないか，難しくて読み終えることが出来ないのではないかと思ったが，そんな考えはすぐに消し飛んでしまった。書きだしからとてもおもしろくまるであきないのだ。さすがは夏目漱石と思った。

今まで僕が読んできた小説類とは又，違ったおもしろさが本全体にあふれており結局，時の立つのも忘れ最後まで読みとおしてしまった。

この本の魅力は，主人公の坊っちゃんである。読んでいくうちに，坊っちゃんという人間にどんどん引かれて，とりこになってしまったほどである。江戸っ子で一本気な性格の坊っちゃんは，やることなすことすごいことばかりで，自分のやりたいことをやり，自分の生きたいとおりに生きている。そんな坊っちゃんの生き方に僕はあこがれてしまった。

坊っちゃんは子供の頃から無鉄砲で負けず嫌いでわんぱくだった。しかしこの性格のためおやじにはいつもしかられ，損ばかりしていてろくな目に合わなかった。この性格は大人になっても変わることはなかった。

物理学校を出た坊っちゃんは，四国の田舎中学校へ教師として赴任することになった。これも持ち前の無鉄砲さによるものだった。

僕は，教師になった坊っちゃんがどんな活躍をするのか心がはずむ思いだった。

四国の中学校に赴任した坊っちゃんは，そこで生徒達と先生たちとさまざまな事件を巻き起こした。といっても笑い話の様な物がほとんどである。

たとえば，坊っちゃんが宿直で学校に泊まっていて眠ろうとしたとき，布団の中からバッタが飛び出してきたことがある。これは生徒のいたずらだったのだが，この後の坊っちゃんと生徒のやりとりがおもしろい。坊っちゃんが「なんでバッタなんか，おれの床に入れた」と言うと，生徒が「バッタとはなんぞな」「それはイナゴぞなもし」などと

とぼけてみせたりする。

また坊っちゃんは，ここに来てさまざまな人と出会った。

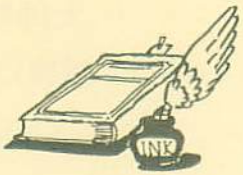
教頭の赤シャツと画学の教師野だいこの二人とは坊っちゃんは仲が悪く，最後には玉子をぶつけたりして，やっつけてしまうのだが，その時の野だいこや赤シャツの玉子の黄味でぐちゃぐちゃになった顔が目にうかび思わず笑ってしまった。

この時，坊っちゃんと一緒になって赤シャツ達をやっつけたのが，山あらしというあだ名の数学の先生で，僕がこの本の中で坊っちゃんの次に好きな人物である。

この他にも，マドンナと呼ばれる魅力的な女性も出てくる。坊っちゃんも好きになってしまうのだが。

他にも，マドンナの恋人である英語の教師のうらなりやたぬき校長，たくさんの生徒達，こうしたさまざまな人々との出会いをとおし，坊っちゃんの物の考え方，生き方が描かれている。

ユーモアでつづった物語の中にも，なにか心に残るものがあった。それは，読み終えた僕の心の中に今でも印象深く残っている。



カフカの「変身」
―巨大な褐色の虫の象徴について―

3年電気　猪　狩　真　一

私は，この「巨大な褐色の虫」の象徴を，ユング，フロイトの分析，超物質現象論，シャーマンにみられる抽象的な行動性の三つの論をベースとして考えてみた。

まず，グレゴールが変身したのはみにくい毒虫であるということに注目したい。超物質現象論は「人間意識コントロール説」に非常に注目しているのだが，これは，人間はある種の深層意識制御のシステムに組み込まれ，リードされているというもので，それは必要状況に応じた形で超自然的現象を引き起こすと考えられるということである。

その際に出現するのは，人間に恐怖感を与えるような醜い姿形を持ち，理解できない行為や有害なイタズラを引きおこすものと，それと対照的に安心感を与え，一種信仰の対象になりえる様なものの一対である。私は，まさしく，変身したグレゴールと彼の望む家庭とがこれにあてはまっていることに注目したい。

又，この説の拡張論である「ベアデン理論」によれば次の二点でこれらの事象が説明されている。

①精神現象は物質現象とともに時間を共有する。精神は虚の実在物であり，超空間においては精神物体である。

②精神物体は物質界と精神界の境界を越えると，不安定な物質物体に変化し，現象として存在する。

これらを前提にしたプロセスに必要なものは多層無意識の複合体ではないかと私は考える。更にこれは集団無意識の他に，文化・家族・国家・信条等のさまざまな共通無意識により構成され，人間の個体数分だけ指数関数的に増幅される性質を持つと想像できるが，それほどの力を生じさせ，解放する誘因となるものは何であろうか。

文中におけるグレゴールと彼の家族間の心情とやりとりにも象徴される様なさまざまなストレスはどうだろうか。ベアデン理論においてもその力はストレスであると説いている。すなわち，多層意識複合体のピラミッドの底深く沈みこんださまざまなストレス（不安，憎悪，欲望，不和……）が，私達の，おざなりにされている現実を解放する力となり得るのである……。まさしく毒虫としてのグレゴールはグレゴール自身と家族，場を共有している者のストレスによる物質化した思念形態であると容易に考えられる。事実グレゴールは現実の事象に対し非常に不満をもっていることが文よりうかがえるし，気がかりな夢を見る程のそれは無意識的な憎悪・欲望・不安・自虐の対象として充分であるのだ。

ところで，私がここで夢を持ち出したのはそれなりの理由があるからである。

ユング，フロイトの解析でも明らかであるように、夢は深層意識と非常に密接な関係を持つものと知られているが，おもしろい事に，先ほど述べた無意識の層（ピラミッド）の頂点に存在するのが夢であるということだ。まぎれもなくグレゴールは「気がかりな夢」から目をさました後，変身している自分を発見しているのであるから，この夢は，物質化のプロセスに影響を及ぼしたものであろう。

19世紀の小説家，アナトールフランスは，「夢は現実で我々がおざなりにしたものの残りかすであり、夢は応々にして軽蔑された事実の復讐である」と言い，イギリスのオカルティスト・ウォーカーによれば、眠っている間に夢を見ることを許されない人々は，めざめてから夢を見始め、めざめながらも夢の世界に住み，精神の歯車が狂って，やがて死んでしまうということである。

もしかしたら，この変身はグレゴールがめざめながらもみている夢の世界かもしれない。

今まで無意識を強調してきたが，どうも私にはこの変身が無意識的意識によりコントロールされた事の様に思える部分も存在している。

例えば，シャーマンにみられる抽象的な死の体験が、類似性を持つ様である。シャーマンが、抽象的な死を体験し，様々な意識の世界をめぐって再生する様に，彼の深層無意識も，彼自身が毒虫に変身することで，彼及び彼の家族に抽象的な死を体験させ，再生させる事を望んだのではないだろうか。

彼は抽象的にではなく，実際に殺されてしまうが，その為の毒虫であったのだろう。

そして彼の死後，家族は再生したのであった。あきらかにこの様は，毒虫（文より判断してこれはちょうやがの幼虫であろう）が成虫（ちょうの様な）へといたるメタモルフォーセスを表現し，なんとも言いようのない不思議な恍惚感を味わわせてくれる。ニヒリズムではない。

私はこの文を書き終えて今不安で仕方がない。

「友情」を読んで

2年化学　猪　狩　克　彦

題名とあらすじを読んで，今の歳頃に読むのが適当かと思い，選んでみた。友情や恋愛や社会問題などのさまざまな感情が描かれていて、なかなかよい作品である。

脚本家の野島が，友達の仲田の妹，杉子という女学生に一目ぼれした。そして，その感情が次第に恋に変わっていく。その間の描写がなんとも言えない。どうしても一目見たくて，帰路の途中に遠まわりをしたり，ささいな用事でも仲田の家に出入りしたり，他の友達の所に行って彼女の自慢話をしたり，そうかと思うと，自分があまりしつこいので彼女に嫌われているのではないかと自己嫌悪に落ち入ったり，まあ，誰にでもよくあるようなことなのだが，これがまた，うまく描かれている。海辺で波に石を投げ，その石が波を三つ以上切って飛んだら杉子は自分といっしょになれるんだと仮定して，一人事をしているところなどは共感を覚えて，思わず笑ってしまうが、それがまた最高によい。

ところで，野島が彼女の自慢話をする相手というのが作家の大宮である。彼らはお互いに尊敬しあっていた。彼の自慢話にも，あいそをつかさずにつき合ってやるし，皆の前で彼をほめるし，とにかく野島をたてた。男同士の本当の意味の友達だった。そんなものだから，かねてから大宮にひかれていた杉子もいっそう大宮にひかれてしまった。それをうすうす感づいてしまった大宮は，勉強という口実でパリに行ってしまうことになる。野島も杉子が大宮に恋していることに感づく。

杉子はパリに去った大宮に愛の手紙を送り，大宮は悩みに悩んだ末に友情よりも愛情を選ぶ。やはりこれが人間としては自然なことなのかとも思うが、なかなか考えてしまう。

彼は結局，恋人も友も失い，その情熱を仕事に向け仕事の上で大宮と決闘することを誓う。

ぼくは，この本によって，若さが強く生きるための一つの原動力になっていることを知った。

「太郎物語」
—明るく誠実に生きる青春—

2年電気　木　幡　　仁

この物語は，主人公の太郎がさまざまな事件のうずまく青春時代を，明るく誠実に生きぬこうとして，悩み傷つきながら人生にめざめてゆく姿を描いた物語である。主人公が僕達と同世代の高校生なので，今の自分の立場と比較したり，考えさせられたりする場面が数多くあった。

この物語の主人公は，山本太郎という少年であり，どこにでもいそうな普通の人間である。この山本太郎をとりまく父や母，友人なども，ごく普通の人間たちであるが，太郎の父，山本正二郎については，すばらしい人だと思った。親子の会話などをみると，和気あいあいと，父子の隔りなく話しているようで，やさしさがにじみでてくるように感じた。しかし，その反面，我が子の許されざる行為を見ると，人が変わったように厳しくなるのである。

例えば，ある日太郎が，「テレビなしでは生きられない。」などということを言った。すると父親は

いきなりテレビを持ち上げ，庭石にたたきつけて壊し，「テレビなしで生きられないなら死んでみろ」とどなりつけた。当時少年だった太郎にとってみれば，父親が大きく見えたことだろう。普段はやさしく，場合によっては厳しい。これが父親の本来の姿であると思う。このようなすばらしい人達に見守られながら青春時代を過ごすことのできた太郎がうらやましく思えた。

この本には，「青春時代が輝いたものだろうと言うのは，その人が既に青春を終わった証拠ではないだろうか。」と書いてある。

僕は今，青春時代の真っただ中にいるが，青春と言っても，実感がわかない。毎日毎日をただなんとなく過ごしている感じである。こんなことで青春時代が良い思い出になるのだろうか。良い思い出を作るために特別なことをする必要はないと思うが，青春時代を輝いたものにするためにも，1日1日，充実した生活を送りたいと思う。

「八甲田山死の彷徨」

1年機械　飛　田　　聡

この本の作者，新田次郎の著書は前に幾冊か読んだことがあるが，この本は今までのどの本よりもいろんな面で為になり，面白かった。

この小説は，寒冷地における人間実験の様子を描いたものである。

明治三十五年一月末，青森歩兵第5聯隊と弘前歩兵第31聯隊が，極寒の八甲田山連峰を対露戦の資料を得るために対抗して雪中行軍を行い，第31聯隊は無事その責務を果たし，第5聯隊は雪の八甲田山中で彷徨状態になり，全滅するという悲惨な物語なのである。

僕が，この物語で一番先に感じたことは，雪というものの恐しさと，人間信頼の大切さである。

一月から二月にかけての八甲田山は，土地の人々から白い地獄と呼ばれ，恐れられていた。生存極限の中で第5聯隊は，道に迷い空腹と疲労の為に，ある者は幻覚を覚え，ある者は狂死し，指揮者は自決してしまう。何という自然の脅威であろうか。

指揮をゆだねられた神田中隊長の緻密な計画と卓越した指導力が、そのまま生かされたならば，あるいはこの惨事を軽くすることができたかもしれない。しかし，山田大隊長はことごとく干渉し指揮権を奪い取り，正しい思慮と判断を欠いた奇怪極まる命令を出して隊を混乱させ，雪の中に封じ込められ自滅してしまったのである。大自然の猛威の前には，人間の権力もたわいのないことか。

僕は，この猛威を克服した第31聯隊の原因の一つは，人間信頼にあったと思う。聯隊長は大隊長を信頼し，大隊長は徳島中隊長を信頼してその指揮権を一任した。ある下士官が，案内を頼んだ民間人に不安を抱いたことに対して，徳島中隊長は，次のような事を言っている。「あの二人は、信用のおける人間だと思ったから任せたのだ。人を信ずることのできない者は，自分自身をも見失ってしまうものだ。」と。

僕はこの言葉に心震えるほど感動した。こうした信頼感があったからこそ，あの奇蹟の生還が達成できたのだと思う。何か現代の僕達に欠けている大切なものを指摘されたような感じをも受けたのである。

僕は再び，第5聯隊の指揮者について、その責任問題を考えてみたいと思う。無能なくせに，神田大尉から指揮権を取り上げた山田少佐も悪いことは悪いが，神田大尉は軍からの命令で指揮権を任せられたのだから，山田少佐がいくら上官としていばっていても強い態度で臨み，その任務を果たす事が，最大の責任であると思う。それなのに彼は舌を噛むという形で責任を果たしたのである。また，山田少佐は，少数の兵と共に生存し，救助された後、拳銃自殺をしている。僕は初め、これを軍人として恥かしくない立派な最期だと思って

感動した。だが，後から冷静に考えてみると，何か割り切れない心のむなしさを感じてならなかった。責任を取って死んだって，無謀な行動の道連れにされて，死んでいった多くの兵の生命が生き返ってくる訳ではない。むしろ生還した，山田少佐の場合は多くの下士兵を殺したことに対する世間に負けた，やむを得ない自決であったと，僕は思ったのである。ついでに言うならば，最高の責任は結局，旅団長友田少将にあると思う。彼がもし、第5聯隊と第31聯隊に雪中行軍の競争をさせなかったら，この悲惨な結果にならなかったであろう。

僕は，この本を読みながら，いろんな疑問や矛盾を見つけた。

まず一つは，軍人というのは，絶対的な服務規則があるとは知っていたが，指揮者が間違っている場合でも，命令に従わなければならないのだろうか。僕はそこに矛盾を感じた。

次に，第31聯隊が難所を案内してくれた民間人を宿場町に入る時だけは、隊の後尾につけて歩かせたこと。これは，軍人達が自力で難所を切り抜けてきたという体面を保つためではないかと思う。命をかけて案内してきた人を無視した人間蔑視であり，前に僕が感じた人間信頼と矛盾するように思うし，腹が立ってくる。

そして，最後に遭難者の中に弟を見つけた兄がその形見にと持ち帰った小銃が，思いがけない事件を起こした。僕にはなぜ，そんなに，大きな問題になるのか理解できない。

ともかく，僕はこの本から，人間信頼の大切さ指導者の適正な思慮と判断の必要性，責任の重大さ，人間の生命の大切さなどを学びとった。今後の僕の生活は，これらを指針として，意義のあるものにしたいと思う。

日本最初の女医　荻野吟子の生涯
「花埋み」を読んで

3年電気　仁　田　尚　子

（私の進んできた道はこれでいいのだ。間違っていないのだ。）

「学問好きの娘は家門の恥」という風潮の根強かった明治初期，遠くけわしい医学の道を志す1人の女性がいた――日本最初の女医，荻野吟子である。夫からうつされた業病を異性に診察される屈辱に耐えかねた彼女は，同じ苦しみにあえぐ女性を救うべく，さまざまの偏見と障害を乗りこえて医師の資格を得る。

読み進めていく度に，考えさせられる本だった。自分と吟子との共通点や相違点。明治時代の風潮。女を捨てたはずである吟子の結婚。家の制度。昭和に生まれた自分とは環境からして全く違う吟子それなのに，共鳴する所が多かったのは，やはり「女」であるからなのだろうか。

特に，学生時代の吟子には親しみを持った。大学の医学部の中で男の人にかこまれて勉強していた吟子を自分におきかえてみたりもした。昔も今も（女が勉強なんかしてどうするんだ），（女のくせに生意気な）と考える男の人が多いことは変わらない。吟子の生きていた明治時代は言うまでもないが，現に，今だってそう考える人がいるのだ。私は，高専に入って三年目になるが，学生の中にもやはり女性に対して偏見を持つ人がいて，中傷されるなどと言うことは度々なのである。そのたびに私は，ただ悲しくなる。なぜ分ってくれないのだろうと，吟子も同じ気持だったに違いない。別に男の人を軽視するとか追い抜こうと考えているわけではないのに。ただいっしょに勉強をしていきたいだけなのに。

――「女」であるというだけで――

時代は明治から大正，昭和へと変わった。しかし，人々の考え方はそう変わっていない。だからといって悲観していても仕方がないのだ。吟子の様に，ただ一心に進むだけなのである。そうしてやっているうちに考えを変えてくれる人がいるかもしれない。それは，日本の人口に比べれば、ほんのちっぽけな人数であるけれど，少しづつでも理解者が増えてくれれば，それだけでも充分なのだ。

「潮　騒」
―健やかで素朴な恋の物語―

1年化学　松　崎　正　寛

三島由紀夫の作品を読んだのは，この潮騒が初めてだった。

潮騒の舞台となっている，歌島というのは，愛知県の知多半島付近の小島である。この作品は，この歌島で展開される，青春の恋物語である。

主人公の新治，そして初江という恋人同士は，十分その機会はあるにもかかわらず，一度も性的な接触を試みない。真裸のままで抱き合うという「危険な」場面さえ事なくやりすごされ，結婚に到

るまで，この二人は，純潔を守りぬくのだった。これは，ほとんど信じ難いまでに現代離れした恋人たちだ。今ではとうてい考えられない。もう一人の村の若者，安夫が初江を横合いから奪おうとして，深夜待ち伏せして，暴行におよぼうとしたが，この試みはもちろん失敗に終わって，初江の純潔は少しも乱されることがなかった。

新治，初江，この若い二人の無邪気な恋人同士が、いくつかの障害，不運に見舞われながら，めでたくこれらを乗りこえ，しかも純潔なままで結婚にいたりつくという全体の筋書きが，何とも言いがたい感傷的な気分に僕をした。

一方，初江の父の照吉も，口では何だかんだ言っていたが，実際心の中では、新治を初江のむこにしたいと思っていて，新治がそれにふさわしいかどうかということを，照吉の持船の機帆船歌島丸の船長に確かめさせたりした。少々がんこだが，初江の幸福を願っていちずな照吉には感動した。

伊勢湾の現実の島を舞台として，ほぼ忠実にその地勢・風物を生かして，一層，日本的・現実的に近づけているのがわかる。そして，島全体を描写する言葉の一つ一つが，この「潮騒」の文章にアクセントをつけている。

「潮騒」は，一見現代離れのした，健やかに素朴な恋物語でありながら，同時にあくまでも現代日本の小説として描かれている。

潮騒，私は，この言葉にいいしれぬ神秘さが秘められているように思われてならない。実際，この作品は，素朴で，その中に秘められた神秘さが微妙に光っている作品のように私は思う。

「破戒」を読んで

1年電気　加　藤　卓　也

この本の作者，島崎藤村は詩人であり，自然主義文学の作家でもあった。この本，「破壊」は，自然主義文学の代表作である。

この本を選んだ理由は，前に先生から話を聞いて，読みたいと思っていたからだ。

この本の舞台は，信州下水内郡飯山町という所で，主人公は瀬川丑松という教員である。

丑松は穢多であり，父から，自分の素姓をあかしてはならないと言われていた。ぼくは，同じ人間でありながら穢多ばかり軽蔑される理由がないと思うと同時に，封建的慣習の強い社会にあっては，どこまでも父の戒しめも守って生きてゆくことを強いられる丑松を，とてもかわいそうに思った。

「我は穢多なり」と宣言して勇敢に社会の慣習と戦っている先輩猪子蓮太郎の思想と行動に励まされながらも，丑松は「なぜ自分は学問をして，正しいこと，自由なことを慕うような，そんな思想を持ったのだろう。同じ人間だということを知らなかったら、甘んじて世の中の軽蔑を受けても居られたろうものを。」とまで屈折して考えるようになる。丑松の心を屈折させた時代をぼくは憎み，封建性の強かった昔の社会を知った。

ついに丑松の素姓が明るみに出そうになり，丑松は「自分は素姓をかくそうかくそうとして，持って生まれた自然の性質を銷磨していたのだ。思えば今までの生涯はうその生涯であった。」ということに気づく。丑松が気づいたことは，とてもいいことだとぼくは思った。

こうして丑松は父の戒しめを破り，いっさいを同僚や生徒に告白して教職を辞めるが，生徒に告白するときの，丑松が土下座して生徒にあやまる様子は，当時の穢多の位の低さをあらわしているようで，とてもかわいそうだった。

教員を辞めたあと，丑松は恋人といっしょにアメリカに渡るのだが，文章がアメリカに渡る前の人々との別れで終わっているのが印象的だった。

この本を読み終えて思うことは，人間を差別してはならないということと，現在部落差別がなくてよかったということだ。

「がむしゃら1500キロ」

2年化学　伏　見　伸　一

中学3年，高校入試を控えている1人の少年が50CCのオートバイで長い旅へと出発しようとしている。現在では考えられない事である。もっとも20何年も前の事である。

少年の名は，浮谷東次郎。千葉から大阪への旅を決心したのは何か大きい事をしてみたかったからだそうだ。現在ではあり得ない事ではあるが，もし自分が同じ状況，旅行に行くかどうかとなったら迷わず行かない方を選ぶだろう。高校入試を控えている身でそんな大それた事などできるはずがない。逆に彼の場合，このような事を行うことによって世間一般に，俺は他のやつらとは違うんだ。形式にすっぽりとおさまってはいないんだ。ということを示したかったのではないだろうか。

世の中には，自分では人と違った，しかも自分が選択した道を進みたいと願いながらもそれが出来ずに，波に押し流されて生きている人間が多いと思う。それにくらべて東次郎は我々があこがれながらも実現できないでいる生き方をした人物である。しかし彼もこの旅行の中で大きな疑問を感じないわけにはいかないような出来事に合っている。大阪へ向かう途中で，道端でスイカを売っている幼い少女を見かけた。最初は何気なくこれを見て，「ああスイカを食いたい。」などと思ったが，ハッと気付いた。「自分は親の援助を受けて旅行をし，型にはまっていないなどと言えるのか，あんな小さな子が生活をするために暑い中でスイカを売っている。」そんなことから彼は，この旅行の紀行文を書くことで少しでも彼の気持ちをおさめようとしたのであろう。もし彼がこの少女を見かけなかったら，この本を出版することはなかったであろう。又、彼は彼の生き方こそが最高であると思って過ごしたであろう。しかし，少女を見たことによって彼は彼の最高の生き方を求め続けた。その結果，彼は後になっても光り続ける生き様を他の人々に見せた。レーシングドライバーになったのも，自分を極限の世界におくことで本当の自分の生き様を見い出そうとしたのではなかろうか。23才の若さで彼は自分の生き様をさがし続けながら短い一生を終えた。練習中の事故だった。彼がもし，生きていたならいまだに彼の生き様をさがし続けていただろう。

伝記「牧野富太郎」を読む

3年機械　星　　正　義

日本の学者で，牧野富太郎博士ほど，偉大で優れた人物であり，かつ，その名を広く知られた人は、少ないでしょう。

それは，牧野博士の研究の対象が，植物というだれもの身近にあるものであったからだと思います。また，集めた植物の数が，驚いたことに、なんと50 万点にも上ったということにも原因があるのです。

しかし，何といっても，博士が10 才にもならない子供のころから，96才でその一生を閉じるまで，植物の研究一筋に生きぬいたということが，一番大きな原因だったのではないのでしょうか。

私達の中にも，植物に興味を持っている人もいるでしょうが，博士のように自分の生きがいとして一生を捧げた博士に，私は感銘しました。

牧野博士は自分でも，「私は，植物の精だ。」とか「私が年をとっても，こんなに丈夫なのは，ただひたすらに草木を友として生きてきたからだ。」とよく言われました。

私は，博士に何事でも，最後までやりぬくという喜びを教えられました。

ある日，博士のお嬢さんが，夜明けまでも植物の研究に取り組む博士のからだを心配して，「放っておくと，いつまでもやめませんから，電源のスイッチをはずしてしまって，停電ですから休みましょうといいます。すると，しかたなしにあきらめて，床につきます。」と語られたことがありました。90 才を過ぎても牧野博士の勉強ぶりは，こんなにも一生懸命であったのです。

博士は，子供のころ，からだがとても弱く，おばあさんにおきゅうをすえられたり，にがい薬を飲まされたりして育ちました。また，ずっと後，49才のとき肺を病んで，血をはいたこともありました。もともと，あまり丈夫なからだの持ち主ではなかったのです。それが，96才まで生きて，しかも死の間ぎわまで，研究を怠らなかったというのですから，まったく不思議で，本当に植物の精のように思えてきます。

しかし，本当は不思議でも何でもなかったのです。博士の植物に対する深く・強い愛情，学問が好きで好きでたまらないという心，やりかけたらどこまでもそれをやりぬくねばり強さ，それらがひとつに混り合って，博士の生命を強く燃えたたせたのだろうと思います。

そして，日本と世界の植物界に，数々の大きな手がらをのこしたのです。ことに，植物分類学の上では、偉大な恩人と言えることでしょう。

夏目漱石作「こころ」を読んで

1年化学　庄　司　栄　治

ぼくは，今までにこのような単行本をあまり読んだことがなかった。あまりというより全然と言った方がいいかもしれない。だから278頁という長い文章を読むのは，大変だった。しかし，読み進んでいくにつれて文章から目を離せなくなってきた。これからこのような単行本をどんどん読みたいという意欲も出て来た。

この小説は，三部からなっており，一・二部は，私のこころの動きが細かく表現され，三部では，先生の告白(遺書)が書かれている。

この小説は，夏目漱石の秀作の1つであり，よほど長い間愛読されてきたようだ。私と主人公のこころの動きを知ったことにより，これからの自分が変わっていく気がする。どのように変わるのかわからないが，物事に対する考え方，自分が行動する前の考え方，話し相手に対しての考え方などがより深くなるのではないかと思う。

主人公の先生は，書生時代に親友を裏切って恋人を自分の嫁にしてしまった。そのため親友であるKは，自から命をたったのである。そのため先生は，その後ずっと苦しんできた。月に一度は，親友のお墓参りをするなど孤独なただの知識人になってしまったのである。いつもいつも，過去のことが頭の奥深くにあったのだろう。

3部では，主人公が私に遺書を送っている自分の気持ちを正直に素直に表わしているので，その文章から目が離せなかった。とてもあいまいに読む気にもなれなかった。真剣に次の文字・次の文章を追っていった。

私という人物は，主人公のこころを的確に読みとっていると思う。それも一方の見方ではなく，いろいろな方向からだ。

この小説では登場人物がごく限られているのに，大変多くの人がでて来たような気がする。これは，その人物の行動や心情がいきいきと表現されているからだと思う。

最後に，友達もこの「こころ」を是非読んでもらいたい気持ちでいっぱいである。

「素直な戦士たち」

2年機械　足　立　剛　志

「素直な戦士たち」の戦士とは教育ママの作戦と指揮命令のもとになんの疑問をもつことなく，受験戦争の戦場におもむく子どもたちのことだと思う。

母親の松沢千枝は，子供の英一郎を東大に入れようと，結婚前から最良のコンディションを整えて，出産にのぞんだ。それからは，何もかも英一郎中心の生活がはじまったわけだが，千枝の本当の目的とは，英一郎を高級官僚にもなれれば，ルンペンにもなれる，そういう選択の自由を最大に持てるような子にしようというのである。そのために千枝は育児書や多くの英才教育書を読んだ。又，英一郎には健次という弟がいるが，こちらのほうは，ほったらかしで育てられたので幾分かわいそうだなあと思うところもあった。

年月がたち，子供たちも大きくなった。本当なら兄弟の差はひらいているはずなのに，実際には全くといって良いほど差がなく，いつしか二人はライバルになっていき，千枝の計画は失敗してしまう。まるで精密機械でもつくるような人間味ぬきの，計算ずくだけの教育が成功するはずもなく友人の1人もいない英一郎は本当に不幸な星の下に生まれた，モルモットのように感じられた。

この物語で最も目をみはるべきところは，母親の千枝が自分流の生き方や信念を持っているように錯覚していながら，実は様々のあやしげな学説などに，ふりまわされているところである。又，夫の秋雄は疑問をもちながらも全面協力をする。学説にふり回されたり，きちんとした正しい姿勢をとれないところは，現在の社会で良く見られがちである。そういう意味からこの物語の人物ばかりでなく，我々も素直な戦士の一面を持っているのではないかと思った。

「高瀬舟」を読んで

2年土木　愛　川　克　己

殺人といえば、「恐ろしい」の一言でかたづけられるが、「恐ろしい」と言う前にもっと殺人というものの多様な実態を知る必要があるのではないだろうか？

喜助の弟は治りそうもない病気だから，生きていて喜助の足手まといになるよりも，死んで喜助に楽をさせてやろうと考え，のど笛を切った。しかし，息がそこから漏れるだけで死ねない。だから，横へ滑ってしまった剃刀を「抜いてくれ！そうすると自分は楽に死ねるだろう！手を貸してくれ!!」と，仕事から帰ってきて呆然としている喜助に頼んだ。喜助は，「医者を呼んでくるから待っていてくれ」と出かけようとした。すると弟は，さもうらめしそうな目つきをして，「医者が何になる。ああ苦しい！早く抜いてくれ。頼む」と哀願した。喜助は意を決し剃刀を抜いてやった。

この場合，喜助のやったことは果たして殺人と言えるだろうか？罪というものに値するのだろうか？私にはどう考えても納得できない。自分の弟が死ねないで苦しんでいるのを黙って見ている。また，医者を呼んで助かるものなら，それにこしたことはないが，呼んでも手のほどこしようがなく，苦しみもがきながら死んで行くのを，ただ黙って見ているのみでしかないのだ。それも敵をにらむように，憎々しげで冷酷な目に出会いながら……。

仮に，私が弟の立場だったら，医者を呼んでもらって苦しみもがいて死ぬよりも，剃刀を抜いてもらい，楽に死ねる方を希望するだろう。

また，反対に喜助の立場だったら，どうだろうか？自分の最愛の弟が，死ぬに死なれず苦しみにのたうっている。しかも，決断をしぶっている自分を恐ろしく憎々しげな目で，「早くしろ！早く!!早く!!」と追いたて催促している。砂漠の真ん中でオアシスを求めるように，死を急いでいる弟！自分がちょっと弟のそばに寄り，剃刀を抜いてやれば弟を楽に死なせることができる。そうすることは造作もない。しかし自分が剃刀を抜けば，たった一人の最愛の弟をなくすことになるのだ。

私は，自分の弟を失くすのはいやだ。もしかしたらというかすかな希望をいだいて医者を呼びに……。助からないと分かっていても，死んでもらいたくない，という一心から医者を呼びに行くか。それとも，弟の望みを聞いて剃刀を抜いてやるか。医学の発達した今日から考えると，誰しも文句なく医者を呼びに行くことを，正しいとするに違いない。素人の判断が，危険であることは分かっているから。しかし，まだ医学が漢方薬的な処方でなされていた時代。また，医者の数も，ごくわずかで四里も五里も遠くへ医者を呼びに行かなければならなかった時代。そしてまた，極度の貧困にあえいでいた喜助の生活。果たして，私達が現実に考えるほど簡単な判断ができたであろうか？そう考えてくると，主人公の喜助のやったことは間違ったことでもなければ，殺人というものでもない。と結論づけなければ仕方がなかった。

喜助は，弟殺しの罪に問われ重罪として遠島になっている。喜助は島流しの船の中で，わずか二百文ばかり与えられたお金を大切そうに抱き，今までは，捜してさえもなかなか見つからなかった仕事が，今からは捜さなくても与えられる。また，三度の食事も無料だから，二百文は使わずに自分の財産として持っていることができる。こんなことは，かつての自分の生活にはなかった。それだけでも有難いことだと感謝している。この純粋で正直な喜助の態度を，私達はどう考えたらよいのか。こう考えると喜助の行為が，御奉行などによって裁かれるすじあいのものではないと思う。この問題に限っては，喜助自身の判断と良心によってのみ裁かれるのではないだろうか？このような喜助を思うとき，法の厳しさが，何かやりきれない救いのない気分をいらだたせ，もっと人間としての暖かい裁きがなかったのかと，思わずにはいられなかった。

人間は，自分だけの考えで物事の判断をくだすことが多い。1人1人の人間が，真実をしっかりとふまえて，社会事情を考慮に入れ，1つ1つの問題をより深く追求すれば，そこに暖かいそして厳しい判断ができるのではないだろうか。私は，しばしば「理想を高く持ちすぎる」と言われたことがあった。が，自分自身では必ずしも，そうは思わなかった。だが，この小説を読んで，理想的な考え方とは，単に理想にのみ走るのではなく現実をしっかりととらえて，物事の真実の上に築かなければならないことを知った。1個の人間として未熟な私が，これを読むことによって，ほんの少しだが進歩したように思う。今まで読んだ本の中でこれほどリアルに描かれ考えさせられた小説は，なかったように思う。

新　着　図　書　目　録

※印は図書館　他は各教官の研究室に
所在するものを分類別受入順に記載

総　　記

朝日新聞縮刷版　昭和59年2月～7月号　朝日新聞社※
福島民報縮刷版　昭和59年1月～7月号　福島民報社※

東洋文庫
- 431　南島雑話 1　平凡社※
- 432　〃　2　同　※
- 433　むかしばなし　同　※
- 434　ハジパパの冒険 1　同　※
- 435　大岡政談 1　同　※
- 436　ハジパパの冒険 2　同　※
- 中江兆民全集 1, 2, 4, 8, 10　岩波書店※

人類の知的遺産
- 23　エラスムス　講談社※
- 72　パルト　同　※
- 80　現代の自然科学者　同　※

河野徳吉
- 講座情報と図書館 2　雄山閣※

江達隆也
- 漢文名作選 1　思想　大修館書店

田部井文雄
- 〃　〃　3　漢詩　同

香野礼行
- 漢字名作選 5　同
- 会津戦争　旺文社

金子量重編
- 講座情報と図書館 3　雄山閣出版※

歴史の道 2
- 白河街道越後街道米沢街道下野街道　福島県教育委員会※

新釈漢文大系
- 32　春秋左氏伝三　明治書院※
- 44　唐代伝奇　同　※
- 94　論衡下　同　※

アメリカ古典文庫
- 2　クレブクール　研究社※
- 8　アルフレッドT. マハン　同　※
- 9　フレデリックJ. ターナー　同　※

哲　　学

講座日本思想
- 1　自然　東京大学出版会※
- 2　知性　同　※
- 3　秩序　同　※
- 4　時間　同　※

松長有慶
- 高野山　法蔵館※

八木誠一
- パウロ親鸞イエス禅　同　※

田村圓澄
- 法然とその時代　同　※

大河内了義
- ニーチェと仏教　同　※
- 岩波講座　精神の科学別巻　岩波書店※

G. Eライト
- 聖書の偉大な人びと　学習研究社

日本の神話
- 1　天地創成　ぎょうせい※
- 2　葦原中国　同　※
- 3　天孫降臨　同　※
- 4　神武東征　同　※
- 5　倭健命　同　※
- 6　風土記　同　※

金子晴勇
- アウグスティヌスの人間学　創文社

木田　元
- ハイデガー　20世紀思想家文庫 4　岩波書店※

滝浦静雄
- ウィトゲンシュタイン　〃　6　同　※

中村雄二郎
- 西田幾太郎　〃　〃　8　同　※

廣松　渉
- メルロニポンティ　〃　〃　9　同　※
- 弘法大師　空海　河出書房新社※

宮坂宥勝也
- 空海密教のすべて　朱鷺書房※
- ルネサンスの人間論　有信堂

林　道義
- 無意識の人間学　紀伊国屋書房

エティエンヌ・ジルソン
- アウグスティヌスとトマスアクィナス　みすゞ書房

日本の仏教
- 1　仏教の教え　東京書籍※
- 2　仏教の実践　同　※
- 3　仏教の経典　同　※
- 4　仏と菩薩　同　※
- 5　仏教の歩んだ道 I　同　※
- 6　〃　II　同　※
- 7　日本仏教の宗派　同　※
- 8　庶民と歩んだ僧たち　同　※
- 9　寺院の歴史と伝統　同　※
- 10　仏教の儀礼　同　※

渡辺照宏
- 沙門空海　筑摩書房※
- 弘法大師と現代　同　※

松長有慶
- 密教とはなにか　人文書院※
- 空海の人間学　竹井出版※

金岡秀友
- 仏教を読む　1. 生とはなにか　集英社※

松原哲明
- 〃　2. 宇宙観を開く　同　※

平田精耕
- 〃　3. 一切は空　同　※

平川　彰
- 〃　5. 自在に生きる　同　※

松長有慶
- 〃　7. 秘密の扉を開く　同　※

花山勝友
- 〃　8. 捨ててこそ得る　同　※

鎌田茂雄
- 〃　9. 沈黙の教え　同　※

松原泰道
- 〃　10. こころの開眼　同　※
- 弘法大師空海全集 2　筑波書房※
- 〃　3　同　※
- 〃　4　同　※

渡辺照宏他
- 沙門空海　同　※

相良　亨編
- 日本思想史入門　ぺりかん社

石田一良
- カミと日本文化　同
- 弘法大師空海　河出書房新社

西村公朝
- やさしい仏像の見方　新潮社

講座密教文化
- 1　密教の流伝　人文書院※

木崎喜代治
- ルソー全集別巻 2　白水社※

花田圭介
- ベイコン　勁草書房※

杖下隆英
- ヒューム　同　※

湯浅泰雄
- 神々の誕生　以文社
- 法然と浄土信仰　読売新聞社
- 禅の世界　同
- カント全作 18　理想社

ヒルシュベルガー
- 西洋哲学史III　近代IV　現代　同

歴　　史

日本庶民生活史料集成
- 22　祭礼　三一書房※

井上浩一
- ビザンツ帝国　岩波書店※

図説日本文化の歴史
- 11　明治　小学館※
- 12　大正, 昭和　同　※
- 13　現代付総索引　同　※

徳富蘇峰
- 吉田松陰　岩波クラシックス 59　岩波書店※

黒田俊雄
- 王法と仏法　法蔵館※
- 百年前の日本　小学館※

杉森康二
- 日露日ソ関係〔200年史〕　新時代社※

陳　正祥編
- 中国歴史文化地理図冊　原書房※

清水廣一郎
- 中世イタリヤ商人の世界　平凡社※
- アリラン峠の旅人たち　同　※

喜安　朗
- パリの聖月曜日　同　※

角山　栄
- 路地裏の大英帝国　同　※

熊野　聡
- 北の農民ヴァイキング　同　※

高階秀爾
- ルネッサンス夜話　同　※
- 日本庶民生活史料集成別巻　総目次索引　三一書房※

J. Cデュードニィ
- アトラス現代のソ連邦　原書房※
- 角川日本地名大辞典14 神奈川県　角川書店※

リットン, ストレンチー
- エリザベスとエセックス　中央公論社

大室幹雄
- 桃源の夢想　三省堂
- 世界地理？　東アジア　朝倉書店

鎮目恭夫
- ウィーナー　20世紀思想家文庫 7　岩波書店※
- 世界大地図帳　平凡社
- 空中写真集日本の自然と社会　日本地図センター
- 神奈川県の自然と社会　同

社会科学

イェーリング
権利のための闘争　岩波クラシックス60　岩波書店※
浅見定雄
にせユダヤ人と日本人　朝日新聞社※
服部祥子
精神科医の見たロシア人　同　※
秋山洋子
女たちのモスクワ　勁草書房※
川上恭正
離婚 大国ソ連の女性に何が起きたか　講談社※
加藤　寛
現代ソ連経済の構造　日本経済新聞社※
岩田昌征
ソ連東欧経済事情　有斐閣※
京極純一
日本の政治　東京大学出版会※
石田　雄
日本の社会科学　同　※
ユネスコ文化統計年鑑 1982　原書房※
国際連合世界統計年鑑 1981　同　※
B. Rミッチェル
マクミラン世界歴史統計 I ヨーロッパ編
〃　II 日本アジアアフリカ編　同　※
世界の議会
1　イギリス　ぎょうせい※
2　アメリカ合衆国　同　※
3　ヨーロッパ I　同　※
4　〃　II　同　※
5　〃　III　同　※
6　ソ連東欧　同　※
7　中近東　同　※
8　アジア I　同　※
9　〃　II　同　※
10　アフリカ　同　※
11　カナダ中米　同　※
12　南米オセアニア　同　※
ふるさと伝説の旅
3　関東もののふの詩　小学館※
ジリーカーパー
クラース, イギリス人の階級　サンケイ出版
ケイティスチュワート
食と料理の世界史　学生社
鈴木誠雄
コメニュウス「大教授学」入門上下　明治図書
Industrial Review of Japan 1984　日本経済新聞社
日本民俗文化大系
6　漂泊と定着　小学館※
8　村と村人　同　※
もう一つの世界　庶民信仰　勁草書房※
民衆宗教史叢書
5　御霊信仰　雄山閣※
西部　邁
ケインズ　20世紀思想家文庫7　岩波書店※
沼田　真
環境教育論　東海大学出版会
柳澤章喜
NEC PC－9801／8801／8001mk II ビジネスソフト入門　廣済堂出版
昭和59年度版文部行政要覧　文部行政資料調査会
新時代の都市政策
1　都市政策　ぎょうせい
2　都市計画　同
3　都市整備　同
4　都市財政　同
5　都市経営　同
6　都市経済　同
7　都市と公営企業　同
8　都市防災　同
9　都市環境　同
10　都市と福祉　同
11　都市の教育文化　同
12　都市と公営企業　同
竹内　実他
中国生活誌　大修館書店
林知己夫
調査の科学　ブルーバックスB571　講談社※
昭和58年版　わが外交の近況（外交青書）　大蔵省印刷局※
〃　犯罪白書　同　※
〃　青少年白書　同　※
〃　防災白書　同　※
昭和59年版　〃　同　※
講座社会福祉
5　社会福祉実践の方法と技術　有斐閣※
8　高齢化社会と社会福祉　同　※
経済学大辞典 2.3　東洋経済新報社※
陸羯南全集 9　みすず書房※
五来　重
絵巻物と民俗　角川書店
続　仏教と民俗　同

自然科学

F. R. ラックデュシェエル
科学計算のためのBASIC サブルーチン集 1　2上　2下　現代数学社
光学技術（実験物理学講座6）　共立出版※
電子顕微鏡（〃　23）　同　※
加速器（〃　28）　同　※
市村　浩
熱学演習－統計力学　裳華房※
平川金四郎
中性子物理の世界（ブルーバックスB528）　講談社※
現代天文学小事典（〃　B529）　同　※
吉川武彦
恥の文化と精神医療　批評社※
問題解法，三角法辞典　聖文社※
加納　敏
実用速算べんり帖　東京図書※
道脇義正
工科のための微積分入門　同　※
小野　周
物理学One Point 9 表面張力　共立出版※
成瀬立成
〃　10 EとH，DとB　同　※
嗣沼芳郎
〃　11 干渉および干渉性　同　※
大槻義彦
〃　12 相対性原理の視点　同　※
三島信彦
〃　13 マイコン物理　同　※
山口重雄
〃　14 屈折率　同　※
小出昭一郎
〃　15 物理と微積分　同　※
青野　修
〃　16 次元と次元解析　同　※
佐藤　浩
〃　17 乱流　同　※
小出昭一郎
〃　18 不確定性原理　同　※
和田正信
〃　19 放射の物理　同　※
勝木　渥
〃　20 物理が好きになる本　同　※
塚田　捷
〃　21 仕事関数　同　※
西川喜良
〃　22 核　同　※
黒沢達美
〃　23 電流と電気伝導　同　※
中山正敏
〃　24 静電誘導　同　※
平田義正
天然物有機化学　岩波書店※
大槻義彦
〃　25 物理便利帖　同　※
畑中正一
がんはどこまでわかったか　講談社※
阪上正信
たのしい化学実験 ブルーバックス560　同※
高村多賀子
関数解析入門　朝倉書店
佐藤　弦
化学実験の基礎知識　丸善
P. Suppan
光化学の基礎　同
吉岡甲子郎
基礎演習シリーズ，基礎化学　裳華房
図説地図事典　武蔵堂
科学の本の本　ブルーバックス562　講談社※
佐藤文隆
ビッグバン　ブルーバックス564　同　※
木田盈四郎
遺伝を考えた人間の話　〃　565　同　※
中村登流
野鳥検索小図鑑　〃　566　同　※
山下文男
写真記録近代日本津波誌　青磁社
哀史三陸大津波　同
西村嘉助
応用地形学　大明堂
科学技術熟語表現大辞典　和英編
〃　〃　英和編　インターブレス※
P. チャドウイック
連続体力学　ブレイン図書
恒藤敏彦
弾性体と流体　岩波書店
松中昭一編
図説環境汚染と指標生物　朝倉書店
野村正七
地図投影法　日本地図センター
M. J. Kirkby
新しい水文学　朝倉書店
細井　勉
イプシロン，デルタを理解するために　日本評論社
ケイスエリス
不眠に打ち勝つ法　ブルーバックスB567　講談社※
森永晴彦
放射能を考える　〃　B568　同※
大槻義彦
透明人間の科学　〃　B570　同※
全国科学博物館ガイド　同※
飯田博美
絵とき放射線のやさしい知識　オーム社
田村善蔵他
けい光分析　講談社
染野　檀
表面分析　同
六位対数表　日本測量協会
吉川敏則
PC－8801　実用数値計算プログラム集　昭晃堂
朝倉　正
異常気象時代 ブルーバックスB574　講談社※

村上和雄
バイオテクノロジー 〃 B575 同 ※
大木幸介
毒物雑学事典 〃 B569 同 ※
守屋喜久夫
災害の地理学 〃 B576 同 ※
植原和郎
新しい人類遺伝学 〃 B577 同 ※
B. C. Gates
触媒プロセス化学 東京化学同人
野崎 一
有機化学 講談社
W. G. Breck
Chemistry for Science and Engineering Mcgraw-Hill
Chemistry : Principles and Applications 同
Peter. G. Sly
Sediment/Freshwater Interaction Junk
L. S. Ettre
Open Tubvlar Cdlumns in Gaschromatography Plenum-Press
Walter. G Jennings
Applications of Glass Cepillary Gas Chromatography Dekker
Richard. J. Briggs
Beams'83 High-Power Particle Beams Physics International Company
G. Lolli他
Logic Colloquium'82 North-Holl and
C. A. Prisco
Some properties of stat ionary sets P. W. N.

工　学

樋口健治
自動車雑学事典 ブルーバックスB561講談社※
後藤尚久
電磁波とはなにか 〃 B563 同 ※
丸山 清他
機能めっき 日刊工業新聞社
第29回材料強度と破壊 国内シンポジウム
論文集29巻 安全強度研究協会
材料大事典 産業調査会
日本音響学会昭和59年度春季研究発表会 日本音響学会
地下構造物ハンドブック 建設産業調査会
最新接合技術総覧 産業技術サービスセンター※
金属・無機・高分子材料 研究開発資料※
第8回システムシンポジウム講演論文集 計測自動制御学会
第9回システムシンポジウム講演論文集 同
新体系土木工学
14 土木地質 技報堂※
69 空港 同 ※
石橋勇一
英和独露電気術語大辞典 オーム社※
J. L. ピーターソン
ペリトネット入門 共立出版
大木丈久
よくわかるマシン語プログラミング CQ出版社
丹羽一夫
便利な電源 日本放送出版協会
中島平太郎
スピーカー 同
新版情報処理ハンドブック オーム社※
八束はじめ
ルコルビュジェ 20世紀思想家文庫10 岩波書店※
ア. エムヤムポリスキー
めっき技術ハンドブック 新日本鋳鍛造協会
川村 清
PC－8001mkⅡ 解析マニュアルⅠ
〃 〃 Ⅱ 秀和システムトレーディング
中東美明
マイコンによるデータ整理 培風館
JIS使い方シリーズ製図マニュアル基本編 日本規格協会
城戸健一
FFTアナライザ活用マニュアル 日本プラントメンテナンス協会
NECPC-8800シリーズプログラミング教本 廣済堂出版
〃 〃 ゲームプログラム 工学図書
山口富士夫
コンピュタディスプレイによる形状処理工学(I) 日刊工業新聞社
柳井久義
集積回路工学電気電子工学大系14 コロナ社
大原省爾他
光通信電気電子工学大系73 同
有本 卓
信号画像のディジタル処理 産業図書
松井昌幸
公害防止の管理と実務 日刊工業新聞社
セメント技術年報36 昭和57年(1982) セメント協会
依田 彦
工学系のためのOR 朝倉書店
佐々木直雄
わかりやすい土木技術土圧系シールト工法 鹿島出版会
栗原和夫
〃 泥水加圧シールト工法 同
建設プロジェクトの進め方 土木学会
武藤 清
趣味の構造力学 市ケ谷出版社
アルバートJラットレッジ
公園の解剖 鹿島出版社
人間のための公園 同
産業用ロボット技術ハンドブック 新産業技術センター
複合構造解析システム説明書FXI 52－6 日本電気
〃 〃 例題編54－3 同
ISAPディジタルプロッタサブシステム説明書 同
加川幸雄
開領域問題のための有限／境界素法 サイエンス社
C. A. プレビア
境界要素法の応用Ⅰ・Ⅱ 企画センター
境界要素法入門 培風館
神谷紀生
FORTRANと有限要素法／境界要素法 サイエンス社
境界要素法の基礎 培風館
田中正隆
境界要素法-基礎と応用 丸善
走査電子顕微鏡の基礎と応用 共立出版
神谷紀生
有限要素法と境界要素法 サイエンス社
脇 英世
計測自動化のためのマイコン標準インターフェース オーム社
装置材料の寿命予測入門 丸善
C. V. ケーグル
接着設計 近代編集社
Nicholas. J. Delallis
金属接着 同
JISハンドブック電気1984 日本規格協会
〃 電子1984 同
〃 情報処理1984 同
加川幸雄
電気電子のための有限要素法の実際 オーム社
シミュレーション技術Ⅲ有限要素法 コロナ社
中谷恒敏
dBASE基礎例題方式テキスト アコムインターナショナル
土木工学大系3 自然環境論Ⅱ 彰国社
〃 4 〃 Ⅲ 同
〃 34 ケースタディ土構造 同
昭和59年度版 水資源のすべて 建設行政調査会
複合構造解析システム説明書FXI 52－6 日本電気
ISAPディジタルプロッタサブシステム説明書 FXI 56－4 同
戸川隼人
続マイコンによる有限要素解析 培風館※
榎園正人
マイコンによる境界要素解析 同 ※
鷲津久一郎
エネルギ原理入門 同 ※
浅野 進他
材料強度物性学 オーム社
雨宮好文
図解メカトロニクス入門シリーズ電子機械制御入門 同
前川禎男他
マイコン制御ロボット入門 同
工藤文彦他
PC－8801 BASIC入門 アスキー出版
宗 孝
仕様書の書き方まとめ方 技術評論社
59年版技能検定1.2級機械製図の総合研究 同
59年版 〃 〃 板金溶接の総合研究 同
戸川隼人
有限要素法概論 培風館
薄膜ハンドブック オーム社
小松定夫
構造解析学演習1 丸善
JIS使い方シリーズ製図マニュアル基本編 日本規格協会
塚本正文
BASIC数値計算と図形処理 森北出版
工事測量現場必携 同
アナログデバイセズデータブックCQ出版
昭和59年電気学会全国大会講演論文集 電気学会
海外研究開発レポートセラミック材料の熱応力及び熱衝撃抵抗解析 日本技術資料センター
金子一郎他
粗粒沈床 日本河川協会
遠田良喜
有限要素法の基礎 培風館
町田 進
延性破壊力学 日刊工業新聞社

宇田川銈久
論理数学とディジタル回路　朝倉書店
垂井忠明他
ディジタル計算回路　同
山本外史
ディジタル技術　同
マイクロコンピュータハンドブック　同
矢田光治
技術シリーズマイコン　同
丸山　清他
機能めっき　日刊工業新聞社
現代測量学 6 写真測量 1　日本測量協会
微生物による環境制御管理技術マニュアル
環境技術研究会
ダム技術用語辞典　日本ダム会議
昭和 59 年版環境白書　大蔵省印刷局☆
鉄鋼材料を生かす熱処理技術　アグネ
金綱　均
太陽熱温水器製作ガイドブック　パワー社
豊谷正洋
PC－9801 全回路図　アスキー出版
浅野泰之
PC－9801 システム解析上下　同
センサインターフェーシング 1, 2　CQ出版
高橋　清他
センサ技術新時代　工業調査会
2 訂公害防止の技術と法規水質編
産業公害防止協会☆
公害防止管理者等国家試験問題正解とヒント　同☆
昭和 58 年版原子力白書　大蔵省印刷局☆
〃　科学技術白書　同☆
マイクロコンピュータの事典　朝倉書店
機械用語集　日本機械学会
山之上寛二
機械技術者のためのマイコン制御入門
日刊工業新聞社
淵　啓二他
マイコン制御ハンドロボット　パワー社
雨倉好文
工学基礎電気工学　培風館
塩田泰仁
実践メカトロニクスマイコン制御　産業図書
〃　〃　アクチュエータ　同
吉川和光
やさしいセンサ技術　工業調査会
塩田泰仁
メカトロニクスのセンサ技術
総合電子出版社
日本機械学会編
写真集流れ　丸善
大橋秀雄
流体力学(I)　コロナ社
谷　一郎編
流体力学の進歩境界層　丸善
戸川隼人
16 ビットパソコンPC 9801 BASIC
サイエンス社
パソコンによる境界要素法入門　同
ニコラス, P. チロニス
実例メカニカルコントロール 1. 不等速伝動装置　大河出版
〃　〃　2. 変速装置　同
〃　〃　3. 動力変換機器　同
〃　〃　4. 動力伝達とその制御　同
飯吉精一
ある土木者像いまこの人を見よ
技報堂出版☆
世界建築事典　鹿島出版会☆

高山秀造他
PC－8001 mkII によるプログラムテクニック入門　パワー社
萩原　登
パソコンによる機械設計基礎演習　同
坪島茂彦
モータ技術百科　オーム社
見城尚志
ステッピングモータの基礎と応用
総合電子出版社
丹野頼元
機械技術者のためのやさしいエレクトロニクス　工業調査会
福永太郎他
JIS 使い方シリーズ機械製図マニュアル
日本規格協会
JIS ハンドブック機械要素 1984　同
町田　進
延性破壊力学　日刊工業新聞社
坂田四郎
事務間接部門のJQC　同
黒瀬能聿
FORTRAN－80 ロボット制御回路解析への応用　啓学出版
守　誠
水道，蛇口からの警告　家の光協会
萱田和男他
河川の土砂災害と対策　森北出版
M. A ジャスウォン
境界要素法＜間接法と直接法＞
ブレイン図書
ミカエル D. グリーンベング
応用グリーン関数　同
塚本尚久
機械製図演習問題と解答　技報堂出版
江川幸一
マイコンによるデータ計測　培風館
セラミックスセンサ　技献
坂竜貞夫
熱センサ入門　啓学出版
大泉光一
生産工程における技術革新　共立出版
牧　廣編
エンジニアリングプラスチック　産業図書
電子工業用プラスチック　工業調査会
藤田　英時
PC Techknow 3800　システムソフト
榊　正憲
PC－9801 ガイドブック　アスキー出版
昭和 59 年版建設白書　大蔵省印刷局☆
W. N. ヒュービン
科学者と技術者のための BASIC プログラミング　現代数学者
中川　徹
科学者技術者のためのフォートラン
東京化学同人
戸川隼人
続マイコンによる有限要素解析　培風館
国尾　武
破壊力学実験法　朝倉書店
黒部貞一
パルス回路　同
加川幸雄
電気電子のための有限要素法の実際
オーム社
シミュレーション技術 III 有限要素法
コロナ社
小貫　天
現代電気系有限要素法　オーム社
二木久夫他
温度センサ　日刊工業新聞社
三輪茂雄
粉体工学実験マニュアル　同

小規模吊橋指針同解説　日本道路協会
昭和 59 年電気四学会連合大会講演論文集 1～5　電気学会
石原藤夫
銀河旅行PART II（ブルーバックス B 379）
講談社☆
河崎俊夫
飛行機雑学事典（〃 B 527）
同☆
センサデバイスハンドブック　情報調査会
金子　良
水文学講座 12 農業水文学　共立出版
Ani I Kumar
Fundamentals of polymer science and engineering　Mc Graw－Hill
Edward V. Thompson
Introducti on to chemical engineering
同
Max S. Peters
Plant design and econmics for. chemical engineers　同
Leslie A. Hurck:n
English for science and technology: a handbook for nonnative speakers
Herbert. B. Michaelson　同
How to write and publish engineering papers and reports　ISI. Press
Analysis of organic micropollutants in water　Reidel
Environmental effects of organic and Inorganic contaminants in sewage sludge sowage　同
Pflügr
Statikder Stabtragwerke　Springer☆
Zellerer
Durchlaufträger　Ernst☆
Frity Leonhardt
Brucken Bridges　Dva
Frederick S. Merritt
Standard handbook for civil engineers
McGrow－Hill☆
Concrete reinforcement technology
Georgi Publishing Company
Technical English reader 1 MacMillan☆
C.J.Beevers
Abuences in crackl emgth measurement
EMAS
Lynette Beardwood
A.First course in technical English students book 1　H.E.B
S.W.Freiman
Fracture mechanice for ceramics rocks and Concrdte　A.S.T.M
S.J.Hudak
Fatigue crack grawth measurement and data analysis　同

産　業

森永和彦
ソ連の食糧戦略　家の光協力☆
英和貿易産業辞典　研究社
昭和 58 年度版通信白書　大蔵省印刷局☆
昭和 58 年度版運輸白書　同☆
昭和 58 年度版国土利用白書　同☆
昭和 59 年度版国土利用白書　同☆
Utilisation of Sewage Sludge Land: Rates of Application and Long－Term Effects of Metals　Reidal
I'nfluence of Sewage Application on physical and Biological Slvdge properties of Soils　同

芸　術

毛利　久
　仏像東漸　法蔵館☆
大串純夫
　来迎芸術　同☆
久野　健
　飛鳥白鳳天平仏　同☆
南郷継正
　武道とは何か　三一書房
三橋秀三
　剣道　大修館書房
猪熊　功
　ベスト柔道　講談社
　全集日本の古寺1　中尊寺と東北の古寺集英社☆
　〃　9　京の禅寺　同☆
　〃　10　法隆寺と斑鳩生駒の古寺　同☆
　〃　11　東大寺新薬師寺　同☆
　〃　13　薬師寺唐招提寺　同☆
篠田正浩
　エイゼンシュテイン20世紀思想家文庫3　岩波書店☆
飯田善国
　ピカソ　〃　〃　〃　5　同☆
小谷澄之
　最新柔道の形　全　不味堂出版
丸山三造編
　大日本柔道史　第一書房
桜庭　武
　柔道史攷　同
下川　廉
　剣道の発達　同
　体育と競技　第1－7巻　第一書房
池上晴夫
　健康のためのスポーツ歴学　講談社☆

語　学

荒木一雄編
　英文法用例辞典　研究社
Addevries
　イメージシンボル事典　大修館書店
　英語基本語彙辞事典　中教出版
　リーダーズ英和辞典　研究社
　古語大辞典　小学館☆
田中克彦
　チョムスキー　岩波書店☆
ウオレンラム
　ボディコート　紀伊国屋書房
林　大他
　文章とは何か　現代作文講座1　明治書院☆
　作文の技術　〃　5　同☆
　文字と表記　〃　6　同☆
　文章活動の歩み　〃　8　同☆

文　学

筑島謙三
　ラフカディオハーンの日本観　勁草書房☆
　詩歌第一軸～第四軸　教育出版センター
B. クリック
　ジョージオーウェル　上下　岩波書店
　日本古典文学大辞典　1. 2. 3. 4　同☆
辻　邦生
　トーマスマス20世紀思想家文庫1　同☆
見田宗介
　宮沢賢治　〃　12　同☆
益子政史
　ダンからワイヤットへ　八潮出版社
　村岡勇先生喜寿記念論文集英文学試論　金星堂
横山伊勢雄
　政治と戦乱　中国古典詩聚花1　小学館
石川忠久
　隠逸と田園　中国古典詩聚花2　同
筑摩世界文学大系
　81　ボルヘス　ナボコフ　同
　有島武郎全集　13　同
佐々木幸綱
　東歌　日本詩人選　21　同
三沢佳子
　ジョージ・オーウェル研究　御茶の水書房
　John Donne and the Jesuits
　University Microfilms International
　紀伊国屋書店

寄贈図書紹介

この度下記各位が，図書を寄贈して下さいました。厚くお礼申し上げます。
ついては末長く図書館に備付け活用させていただきます。

技報堂出版殿
高橋浩二
　工事災害と安全対策（新体系土木工学別巻）
東北電力株式会社殿
　技味心　東北七県の地場産業
日本電子計算機殿
　JECCコンピューターノート　1983年版
エスビー食品殿
山崎峯次郎
　香辛料5
日本アイビーエム殿
朝永振一郎著作集
　11量子力学と私　12紀行と関談
大陽工業株式会社殿
酒井邦恭
　機械装置師の末裔
すまい株式会社殿
　つれだっていわきを描いた作家たち展
　1954年項
旭硝子工業技術奨勧会殿
　旭硝子工業技術奨勧会研究報告Vol42,43 1983
　〃　昭和59年度年報
鹿島港工事事務所殿
　巨大人工港の建設　鹿島港の20年
　鹿島港建設記録　昭和59年3月
NHKいわき放送局殿
　NHK年鑑　'83
田中貴金属工業殿
Donald Mc Donald
　プラチナとその同族金属の歴史
小名浜港湾工事事務所殿
　小名浜沿岸域形成史
アマダ株式会社殿
　アマダ最新機電用語事典　メデイック
日本光学殿
　貿易之日本別冊世界のニコンが築く先端技術の全貌
PHP研究所殿
坪内寿夫
　成功への意識革命
土木研究所殿
　天然資源の開発利用に関する日米会議耐風耐震構造専門会第15回合同部会議録　1983
いわき文化財出版会殿
　いわき文化財
日産自動車株式会社殿
　21世紀への道　日産自動車50年史
　衛生通信年報　昭和57年度
　国際電信電話年報　昭和57年度
三田工業殿
　科学技術の最前線
　科学技術の新しい流れにどう対応するか
壁装材料協会殿
小野　隆
　インテリアコーディネーター読本
内閣総理大臣官房広報室殿
　昭和59年白書
吉田工業株式会社殿
　Y・K・K五十年史
コセキ貴金属店殿
　光跡60年1984年小関庄太郎写真集
官報通信社殿
　中国資源総覧
盛岡工事局仙台工事事務所殿
　東北新幹線工事誌　黒川有壁間
環境科学教育センター殿
　環境工学　1人間と環境
　〃　2エコロジー
　〃　3環境アセスメント
　〃　4大気環境
　〃　5水環境
　〃　6騒音・振動
佐々木史郎殿
　Jeonbug National University 1982－1983
　田舞空間　1982－1983